大学教育研究　三重大学授業研究交流誌　　2012，第 20 号，41－50 頁

学生は体験から何を学ぶのか

－「美し国おこし三重実践」の取り組みから－

川島 一晃（共通教育センター）

1.　はじめに

人間にとって他者は非常に重要な対象である。それは他者との関わりの中で我々は実に多様なものを経験するからである。例えば、自分と異なる対象と出会うことで省察が生まれ、新たな価値観や視点を発見することがあるかもしれない。あるいは挫折や苦悩といった手痛い傷すら負う可能性をも包含される。そして興味深いもので、他者にどのように向き合うかという我々の姿勢如何で、その経験の持つ意味合いは実に多様に変化しうる [1)]。したがって、どのように自分以外の世界である他者と相対するかという姿勢が重要となってくる。

筆者はこれまで心理的支援の実践の場で、あるいは教育の現場において、眼前のクライエントや生徒たちからそれを教えられ、また育まれてきた。それらのどれもが、生きた相手との「生もの」のやり取りであり、自身の身体を通した“体験”[2)]から生まれたものであった。本稿は、「美し国おこし三重実践」と題された講義において、実際の交流や取り組みにおける学生個人の体験の中から学ぶことに重点を置いた実践を振り返り、学生の学びを考察することで実践的講義の意味と可能性を検討するものである。

2.　講義「美し国おこし三重実践」

本稿の舞台となる講義「美し国おこし三重実践」は、共通教育における主題Ⅰ「生きる力とキャリア形成」に属するキャリア実践科目として新設された科目である。

本学のキャリア教育は、2010 年度に採択された文部科学省「大学生の就業力育成支援プログラム」における「自他共に成長を目指す幅広い職業人の養成」[3)]（図１）を背景に展開してきている。共通教育における現在の開設科目（表１）を概観すると「自他ともに成長を目指す社会性」と、「主体的に実践知を獲得する自立性」の獲得を目的とし、前期にはキャリアプランニングをはじめとした多様な視点の獲得が期待される講義形式の科目が開設され、後期にはそれらの学習を踏まえ、実際に実践しながら学びを展開すべく実践を重視したキャリア実践科目が配置されている。「美し国おこし三重実践」は、後者として三重県の地域行政として展開している「美し国おこし三重プロジェクト[1]」や地域行政に携わる実践者との直接の交流をその実践の素材として取り上げ、学生の社会性・自立性にアプローチすることを試みた。なお、本講義は三重県美し国おこし三重プロジェクト事務局の全面的な協力体制のもと幾度も打ち合わせを行い、講義内容やゲスト講師としてお招きするグループの調整などの支援を随時いただき成立したことを申し添えたい。本講義の講義内容一覧を表 2 に示す。

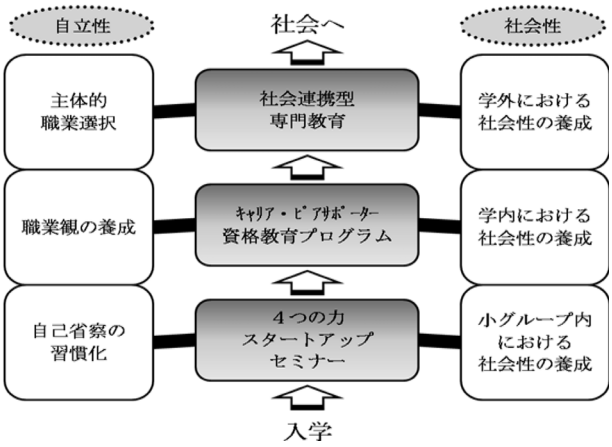

図１　就業力育成支援事業における実践知養成プログラム

[1] 美し国おこし三重プロジェクト：三重県による平成 21 年から平成 26 年までまでの６年間にわたる「特色ある地域資源を生かした自立・持続可能で元気な地域づくり」をめざす取組（http://www.pref.mie.lg.jp/UMASHI/HP/index.shtm）。

表１　2011 年度共通教育主題Ⅰにおける開設科目一覧　（履修案内[4] をもとに作成）

	科目名	区分	開講時期	授業のテーマ
1	アントレプレナー論	総合科目	前期	企業マインドの醸成
2	4つのカスタートアップセミナー	通常科目	前期	感じる力、考える力、コミュニケーション力、生きる力
3	キャリアプランニング	通常科目	前期・後期	将来の生き方をプランニングする
4	こころのサポート	通常科目	前期・後期	心理的問題の理解と解決、心理的サポートの実際
5	AI －人と組織を生かす発想法－	通常科目	前期	アプリシエーテイヴ・インクワイアリー
6	キャリア形成・能力開発	通常科目	前期	キャリア形成・能力開発
7	キャリアインターンシップ	通常科目	前期	官公庁・企業でのインターンシップ
8	法則探検入門	通常科目	前期	法則、発見、説明、解釈、応用
9	現代の消費生活と消費者の自立	通常科目	前期	消費者教育、消費者の権利、消費者問題、意志決定能力
10	学習支援実践	通常科目	前期	学習支援
11	環境ISO実践	キャリア実践科目	前期	環境ISO
12	学生生活支援実践	キャリア実践科目	後期	種々の学生支援活動に関する理解と実践
13	大学紹介実践	キャリア実践科目	後期	プロジェクト・マネジメント、大学、紹介、グループ学習
14	広報誌編集実践	キャリア実践科目	後期	出版物の編集プロセスの理解と実践
15	留学生支援実践	キャリア実践科目	後期	留学生支援、交流
16	障がい学生支援実践	キャリア実践科目	後期	障がい学生、支援、福祉
17	**美し国おこし三重実践**	**キャリア実践科目**	**後期**	**「美し国おこし三重プロジェクト」、社会連携、地域づくり**
18	地域づくり実践	キャリア実践科目	後期	まちづくりへの参画
19	法則探検実践	キャリア実践科目	後期	法則探検、発見、プレゼンテーション
20	就職とキャリア形成	通常科目	後期	経営者との対話から就職を考える
21	仕事・社会を知る	通常科目	後期	就職活動の手引き
22	キャリアイベント実践	PBLセミナー	後期	学生がイベントを企画、運営する
23	三重ブランドの創出	総合科目	後期	新たな三重ブランドの創出を目指す

表２　美し国おこし三重実践における講義内容

講義	日付	講義タイトル	内容	ゲストおよび参加協力者
1	10月6日	オリエンテーション	講義全体の内容、評価についてのオリエンテーション	
2	10月13日	美し国おこし三重プロジェクトの理解①（プロジェクト編）	美し国おこし三重プロジェクトをプロデューサーの立場から語っていただき、理解する。	美し国おこし三重事務局：田辺隆志氏, 森谷哲也氏
3	10月20日	美し国おこし三重プロジェクトの理解①（地域行政編）	美し国おこし三重プロジェクトを地域行政の立場から語っていただき、理解する。	美し国おこし三重事務局：藤本和弘氏,田辺隆志氏, 森谷哲也氏
4	10月27日	質問力育成ワークショップ	相手の強みを見い出し、活性化させるインタヴューに関するワーク	
5	11月10日	美し国おこしカフェ①「呼夢フレンズ：地域作業所運営を行うグループ」	地域で実践されている方のお話とワークから地域おこしを理解する。	美し国おこし三重事務局：松本直樹氏, 落合薫氏, 田辺隆志氏, 森谷哲也氏 呼夢フレンズ：堀川まり子氏, 津有機農学校：岡村和哉氏
6	11月17日	振り返り（学びのふりかえりとお礼状の作成）	聞かせていただいた実践からの学びを振り返り、礼状の作成を通しまとめる。	
7	11月24日	振り返り（学びのふりかえりとお礼状の作成）	聞かせていただいた実践からの学びを振り返り、礼状の作成を通しまとめる。	
8	12月1日	美し国おこしカフェ②「津有機農学校：地域で有機農業を推進するグループ」	地域で実践されている方との対話から地域おこしを理解する。	美し国おこし三重事務局：大津春久氏, 田辺隆志氏, 森谷哲也氏 津有機農学校：岡村和哉氏
9	12月8日	振り返り（学びのふりかえりとお礼状の作成）	聞かせていただいた実践からの学びを振り返り、礼状の作成を通しまとめる。	
10	12月15日	美し国おこしカフェ［特別編：対話のススメ］	地域担当プロデューサーによるファシリテーションワークショップ	美し国おこし三重事務局：田辺隆志氏, 森谷哲也氏
11	12月22日	振り返り（学びのふりかえりとお礼状の作成）	ワークショップの体験の振り返り、礼状の作成。	
12	1月12日	美し国おこしカフェ③「美し国おこし三重スタッフ：ソーシャルレジャーを考える」	ソーシャルレジャーという考え方から実際のアクションプランを提案する。	美し国おこし三重事務局：田辺隆志氏, 森谷哲也氏
13	1月19日	振り返り（学びのふりかえり）	実践からの学びを振り返り、まとめる。	
14	1月26日	アカデミック・フェアにむけての発表準備	半期の活動を振り返り、学びの成果を発表としてまとめる	
15	2月2日	同上	半期の活動を振り返り、学びの成果を発表としてまとめる	
	2月14日	アカデミック・フェアに参加	口頭発表にて学びの成果を報告	美し国おこし三重事務局：田辺隆志氏, 森谷哲也氏

上述の通り、本講義では学生と実際の実践者（県行政の担当者、地域で実践されておられる方）との直接の交流がその学びの素材として設定されているため、講義内に「美し国おこしカフェ」と銘打った公開座談会を開催した。

計４回開催された美し国おこしカフェの詳細であるが、第１回、第２回は実際に地域で活動されている美し国おこし三重プロジェクトのグループの方をゲスト講師としてお招きし、実践の内容を分かりやすく学生に語っていただいた。第２回の座談会における学生の反省を踏まえ、第３回のカフェは美し国おこし三重プロジェクト地域担当プロデューサーに「対話のススメ」と題し、ファシリテーションワークショップを提供していただいた。第４回では、これまでの学びの体験を実際の実践につなげる目的で、現在三重県が取り組まれている「ソーシャルレジャー[2]」をテーマに、学生たちの目線から実際のアクションプランを提案するワークショップを開催した。

学生は、カフェでの交流を振り返り、「何に心動かされたのか？」「その学びの背景にある自分の中にある関心やきっかけはどのようなものだろうか？」といった項目によって自身の学びを振り返った。そして実践者であるゲストに対する敬意とお礼を込めて感謝状を作成するという活動を通して、振り返り作業を行った。

[2] ソーシャルレジャー：地域貢献活動である「ソーシャル」な活動と余暇活動である「レジャー」を組み合わせ、地域活動を活性化しようとする新しい試み。

なお本講義の受講生の内訳は表３に示した。次節からは実践者と学生の直接の交流が為された第１回、第２回の美し国おこしカフェを中心に学生の学びについて考察してみたい。

表３　美し国おこし三重実践における履修登録および受講者内訳

	人文	教育	医学科	履修登録者計	受講者計
総受講者数	7	1	1	9	8
1年	3			3	3
2年	2	1		3	3
3年	2			2	2
4年			1	1	0

3.　美し国おこしカフェからの学び

3-1.　第１回美し国おこしカフェ：呼夢フレンズ[3]

美し国おこし三重のパートナーグループである呼夢フレンズをゲストにお迎えし、作業所の運営、障がいを持たれている方の社会参加等についてお話を聞かせていただいた。また実際に作業所で製作されている新聞紙を活用した「ゆめくるバック」（図２）の作り方をご指導いただいた。学生たちは、様々な道具が作業者の特徴に合わせて用意されていることなどを聞き、実際に使わせていただきながら一つ一つの行程を丁寧に作業していた（図３）。第１回カフェの学生の学びのコメントを表４に示す。

図２　ゆめくるバック

図３ 活動中の学生たち

表４　第１回美し国おこしカフェにおけるコメント一覧

学びに関するコメント	所属	学年
呼夢フレンズさんの資料を拝見して、制作している人の楽しさが感じられた。自分もその輪の中に入って作業をしたいと思った。	教育学部	2年
作業所来夢のみなさんは、比較的重度な障害を抱えながらも、自主製品として新聞バッグや冷凍餃子、押し花しおり、手織り製品などを製作されていると聞き、みなさんの仕事への意欲や、社会参加を実感したいという思いが伝わってきました。ゆめくるバッグの製作過程では無理のないように仕事を分担し、それぞれが 協力し合って作業に取り組んでおり、このことにより生まれる「絆」も大切なものになると思います。ただの作業所ではなく、それぞれが「絆」を育み、自他と もに成長していける環境であることが素晴らしいと感じました。また、古新聞という既に需要を失ったものを素材として、おしゃれなバッグを作り出しているとい う点から、「もったいない精神」のようなものが伝わってきて、心を打たれました。	人文学部	2年
お話を聞き、新聞バックや押花カードなど様々な活動を行っていることを知りました。多くの人々はこのような活動や商品があることを知らないと思います。少しでも多くの人たちに新聞バックや押花カードのことを知ってほしいと思い、僕もこのことを周りの人たちに伝えたいと思いました。	人文学部	2年
今回、お話を聞かせていただいて、また、資料を拝見して、多様な活動を行っているということがわかりました。意見交換をしてみて、ゆめくるバックの資料か らはあまり感じることができなかった課題点も存在していて、それを改善するために日々努力されているということがわかりました。	人文学部	1年
ゆめくるバックを製作する過程で、それぞれの長所や得意なことを生かして作業することによって、スムーズに仕事ができるということを発見しました。また、ゆめくるバック製造機のお話でも、「たくさんのアイデアをつなぎ合わせて、試行錯誤することによってひとつのものが完成している」ということが身にしみて感じられました。	人文学部	1年
ハンディキャップを持つ方々が、様々な方の支援を受けて活動されていることは（語弊）が生じるかもしれませんが）理解しているつもりでした。しかし、今回 お話を伺ったり資料を拝見して、呼夢フレンズさんの活動が私の想像を超え、様々な多岐にわたる活動をなさっていることを知りました。これは私にとって、美 し国おこし三重の活動規模だけでなく、ハンディキャップを持つ方の仕事の多様さの両方における新たな発見でした。	人文学部	1年
テレビや雑誌などで障害者の人達のための組合や場所があるのは耳にしたりして知っていましたが、実際に活動をされている方とお話できて、たくさんのことを学びました。作業所の方々が、本当にいろいろ「障害者の方の目線に立って」考えて、工夫してみえることを実感して、本当に素敵だと思いました。（手が痛くならないようにペットボトルでおさえをつくったのはやりやすくて便利ですし、見た目もキラキラしていていいと思いました）	人文学部	3年
あらかじめホームページをチェックして、「予習はばっちりだ！」なんて考えていたのですが、当日になってたくさんの発見ができました。呼夢フレンズは地域の方とのつながりが大きいこと（スタッフのみなさん、保護者のみなさん、学校（きらら学園・四日市大学）、有名な地元の企業、そして美し国おこし）。行動力があるということ。どんな障がい（身体・知的・精神）でも受け入れることで、本当の意味でみんなが共に生きることができる社会を目指しているということ。ゆめくるバッグのもととなったアイディアが焼き芋と四万十にある道の駅で売られていたバッグ、という発想力と情報力の豊かさを持ちあわせているということ。ぎょうざづくりは、四日市ブランドに認定されていたせいか、以前から知っていた事業でした。それだけでも興味があったのですが、この作業の中にも地域との交流（「四日市ブランド」登録、地元に有名店「来来憲」とのコラボ）、得意分野を活かした作業といった視点が見られました。今度はぜひ食べてみたいです。	人文学部	3年

[3] 呼夢フレンズ：三重県四日市で作業所来夢を運営し、障がいのある方への支援活動を行う NPO 法人（http://comfriends.nobody.jp/）

共同参画社会において、福祉、障がい者支援についての理解は重要である。知的な理解に留まらない、実践知に基づいた理解こそが、真に求められることは言うまでもない。今回学生たちは、講師の話を聞き、実際に作業に携わる中で、「支援」の中にある支援者の眼差しを体感したようである。また現場での製作の作業分担の際における利用者の個性や強みを活かした配慮と作業方法への創意工夫は、後続する講義におけるグループでの作業で、“個々人ができることを大切にし、その人に合った作業を分担する形”で実際に実践されることとなる。

3-2. 呼夢フレンズへの感謝状の作成

筆者が学生に課した課題の枠組みは、「多忙な中、お話を聞かせてくださったゲストへの御礼と自分たちの学びをフィードバックする感謝状を作成しなさい」というものであった。学生たちは、議論の上で「利用者の方にも自分たちの感謝の気持ちを伝えたい」と“写真を入れた掲示していただける感謝状”を作成することに決めた。限られた文字数の中で、自分たちの学びと感謝の想いを表現するためにはどうすればよいのか、学生たちはグループに分かれ、学びのコメントを精査しはじめた。共通する学びはどのようなものなのか、何が一番伝えたいものなのか、学生同士いろいろとやり取りしながらの展開が見られた。ある学生はKJ法のやり方をメンバーに紹介し、またある学生は議論の要点を積極的にフリップチャートにメモを取るといった様子が観察された（図４）。字が上手な学生は清書係、飾り付けが好きな学生はデコレーションとグループの中では自然と役割分担が為され協力しながら作業は進展した（図５）。筆者が観察する中で、発見したことは、これほど一つ一つの表現を大切に吟味する経験は日常では希有ではないかという点である。気持ちを伝えるということは非常に難しいこと[5]であるが、幸いにも今回学生たちは感謝状を作成する過程でどの表現が自分たちの気持ちにフィットするのかという議論を展開し、言葉に想いを添えるということを体験したのではないかと感じられた。文字で見ると在り来りな“ありがとうございました”に見えるかもしれないが、学生たちはそこに至るプロセスを踏まえて、自分たちのその言葉に深みがあることに留意する必要がある。

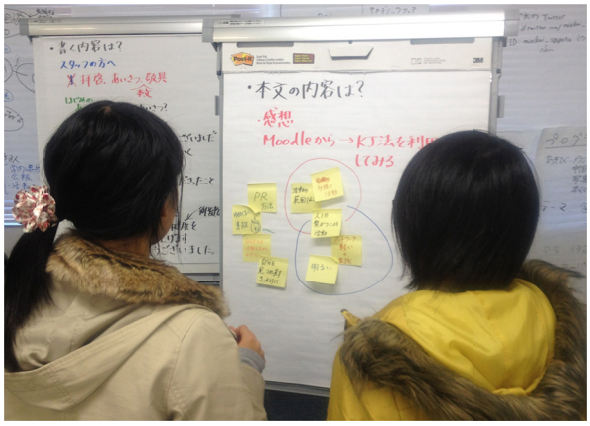

図４　KJ法にて学びを整理する学生

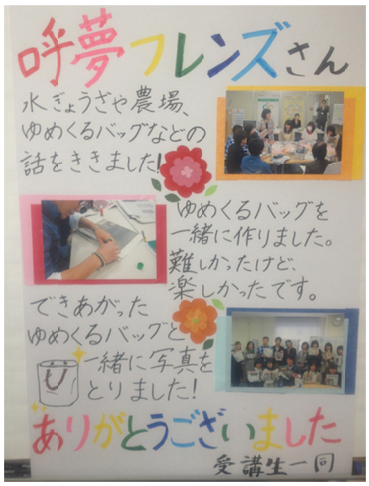

図５　完成した感謝状

3-3. 第２回美し国おこしカフェ：津有機農学校[4]

美し国おこし三重のパートナーグループである津有機農学校の岡村氏をゲストにお迎えし、有機農業を素材に座談会を開催した（図６）。会の司会進行は受講生が行い、

[4]津有機農学校：三重県津市で有機農法を伝える学校を運営し、農業者を支援されている美し国おこし三重パートナーグループ（http://meguminosato.info/2uki/）

事前に進行に関する打ち合わせが為されたが、緊張した雰囲気の中でスタートした。講師の岡村氏からは「素朴で構わないから何でも質問してください」と事前にいただいていたが、学生は緊張からかなかなか発言できない様子が伺われた。農業者の想い、野菜のアレコレ、これからの農業、獣害の問題等、岡村氏からは学生へ様々なテーマが投げかけられた。学生たちは農業というフィールドにおける“これまでとこれからの実践”について熱い想いを次々に言葉にされる講師に何を見たのであろうか。大学生としての自分の意見を問われ、その表現を求められる体験の場で意見を表現できた学生、不完全燃焼となった学生、各々に感じた様子であった。座談会を終えるにあたって、岡村氏から学生に「ぜひ“カッコいい”報告書をまとめてください」と宿題をいただいた。表５に第２回美し国おこしカフェの学生のコメントを示す。

図６　座談会の様子

表５　第２回美し国おこしカフェにおけるコメント一覧

学びに関するコメント	所属	学年
おいしい品種と市場に出回る品種は異なるということは今まで知りませんでした。市場に出回る品種には害虫に対して強いことや見た目が良いこ と、それから安定した収穫が期待されることが必要となります。したがって、市場に出回る品種は必ずしもおいしい品種とは限らないと考えられます。おいしい 品種は通常の品種よりも多くの手間や時間を必要とするので大量生産は難しくなりますが、農家が互いに連携しとり情報交換を積極的に進めたりと、様々な工夫 を加えることで大量生産はもちろん、品質の向上にも繋がるのではないでしょうか。また、農業をテーマにしたゲームが人気を集めているということも今まで知 りませんでした。私自身、少しだけそのようなゲームで実際に遊んでみたことがありますが、その内容は様々な種類の野菜や果物を交配させて新種を生み出し、 それを売ってお金を儲けるというものでした。ゲームの中で何度も自然災害に見舞われ、悔しい思いをしたのを覚えていますが、現実の農業で自然災害に見舞わ れた場合、収入がなくなって借金をすることになりかねません。このようにゲームの中の世界と現実には確かに大きな差がありますが、農産物の消費者が何かを きっかけに農業について関心を持つということが農業そのものの活性化にも繋がるのではないかと思います。	人文学部	2年
有機農業学校を存続するにあたって、様々な苦労があることを知った。岡本さんは目には見えないところで、講師の先生にお願いをしたりするなどの影の努力が 本当にすごいことだと思いました。また、有機農業学校への岡本さんの熱い思いがすごく伝わってきました。有機農業を多くの人に伝えたい、世代を超えて伝 わってほしいという思いに、自分にもできることがあったら少しでも協力をしていきたいと思いました。	人文学部	2年
農業に関することに対して、普段考えることが正直なかなかないため、その農業について考えることができたいい体験になりました。また、自分たちが思ってもいなかった農業に対する考えを聞くことができました。	人文学部	1年
農業に関わらず、お金儲けを考えるほうが（変な表現になりますが）良いものができるという考えには共感できました。好きな野菜だけを育てるのもありだと思いました。	教育学部	2年
私たち農業に携わっていない者と農業者との考えのギャップ。実際に携わっていないと見えてこない現実的な問題があることを改めて実感しました。	人文学部	1年
今回のカフェでは自分にはなかったアイデアに触れることができて面白かったです。そして、私は、今回、お話を伺う中で、農業に携わっていない私たちは、農業の実態だけではなく、野菜に関する知識（旬や特徴、保存方法や料理方法）さえも不足しているために興味がもてない人が多いのではないかと考えました。そこで、岡村さんはトマト好きの例を使って、「農業に興味を持っている人を引き込んだほうが興味を持たない人にアピールするよりも効果的だ」とおっしゃっいました。確かに私も、「自分に関係があることじゃないと興味がもてないし、アピールしても効果はない」ということに共感しました。しかし、もし興味がない 人でも、ベランダーで何か野菜を育てることによってその野菜の特徴を理解したり、季節感を覚えたりして野菜作りや農業に興味が芽生えるのではないかと思い ます。また、そんな小さなことでも、それをきっかけにして農業に興味を持つ人は少なからずいると思います。私たち学生にはそんなきっかけ作りができると思 いました。	人文学部	1年
今回のカフェで学んだことで一番印象が強かったのが、「農業の実際の姿・現状」です。農家が高齢化し、若者離れが進んでいるのは①それで食べていけるか不安 ②早起きや力仕事で大変そう、といったことが原因の一部ではないかと思います。私も実際農業についてそういったイメージを持っていたのですが、岡村さんが実際の農家の様子などをお話してくださったことで、これを知れば若い人ももっと農業に興味を持つかもしれないと実感しました。学生から出た意見のなか で「興味があるしやってみたいけど…機会がない。そんな人向けに何かできないだろうか」というものがありましたが、やはり若い人でも興味を持っていたり、 やってみたいなあ…と漠然と思っている人は多いと思います。そんな人たちにもっと農業についての様々なことを知ってもらう機会を作れれば、きっともっと日 本の農業が活気づいてくるのではないかと思いました。 また農業についてという視点ではないのですが、今回のような集まった人たちの中で活気良く・楽しく意見交換をするためには柔らかく・なごやかな雰囲気作りが 大切ということも学んだので、今回の「自己紹介　好きな野菜添え」といった内容にちなんだ自己紹介などをすれば、互いのことを知れて打ち解けられ、また内容にも繋げていけるのでいいなと思いました。	人文学部	3年
① 野菜にそれぞれ好き嫌いがあるように、農業に興味があるかないかも難しい問題で、すぐにどうにかなるものではない…ということ。少しでも興味のある方向にアプローチするようにする、意識をしてもらう、地道だけど、まずはそこから。②農業に興味がある人は「もうかる」に拒否反応をしめす人が多い！「もうかる」のイメージアップ…もしくは「もうかる」に代わる言い方が必要…？③ゲームとの関連性。無料オンラインゲームで野菜を育てるものがすごく人気。これをどうにか活用できないのだろうか？（私もゲーム内で何かを育てるのにはまるその気持ちがわかります！植物を育てるのに1時間に1回というペースで異常に水やりしていました。）④だいの大人が田んぼで遊ぶ。大人げないことをする・大人がはっちゃけるイベントは大切だと思います。私が参加したB-1グランプリでも、津ぎょうざのスタッフのみなさんが小学生の格好（給食当番風）をして、すごく楽しそうだったのを覚えています！⑤学部間の連携をとって一つの何かを作ること（例ではキムチだったけど）、また学部カラーを出すということの大切さ。せっかく三重大学にいるのだから、他の大学にはないことをしたいですよね！⑥三重県人は内輪で盛り上がる傾向にある！！まさに的を射ているような気がします。そのせいで「三重ってどこ？」…といわれるのかもしれません。（伊勢や鈴鹿…だと有名なのですが）質問一つひとつにそれ以上の「なるほど」と思うようなお答えをしていただき、私にとってさまざまなことを学べた90分間でした。しかし、正直悔しかったです…！！何がかというと、本来ならば学生側から岡村さんが思いつかなかったような面白いアイディアを出したかったのですが、むしろ岡村さんから面白そうなアイディアを教えていただいた結果となってしまったような気がするからです。	人文学部	3年

社会における様々な実践の場の実情は、第一線に赴かないと見えてないものが殆どであることが多い。今回実践されている方の「生の声」を直に聞かせていただいたインパクトは学生に大きく響いたようである。農業を専門としない学生たちは普段あまり意識することのない農業というテーマにおいて、「（ネットで野菜を栽培する）ゲーム」での体験を素材としてイメージを駆使し、様々に考えを巡らせている。しかし座談会の一つの成果として留意すべきコメントは「農業に携わっていない者と農業者との考えのギャップ」、「実際に携わっていないと見えてこない現実的な問題」に言及している点であると思われる。農業に関わらず、机上の知識と実際の場での応用はどちらも重要な欠くことのできない両輪であることが望ましい。今回学生たちのコメントにはまだ現れていないが、自分たちがこれから何をしようとするかに思考が至るとなお学びは深まると考えられる。また座談会の場で十分に意見交換できなかった体験における「正直悔しかった」というコメントも見逃すことができない重要な学びであった。意見を持つこととそれを外に表現することはまた別物である。双方に考えや意見を交換する対話の難しさを知ることで、次に如何に取り組むかという課題や意欲が芽生えるのである。

3-4. 津有機農学校への感謝状の作成

岡村氏からの宿題である「カッコいい報告書」を作成するにあたり、学生たちは「何がカッコいい報告書なのか」について議論を重ねた。内容はもちろんであるが外見も凝ったものにしたいという学生の希望から最終的には巻物としてまとめることが決定した。学生たちは報告書のタイトルを「みちを知る」と付けた。これは“みち”（未知・道：伝統）を知ることが今回の学びであったことを意味している。学生たちは報告書の内容である記事を分割し、複数の作業グループを構成して作業を進めた。これも編集作業が得意な学生がプロデューサーの役割を取り全体を統括し、絵の得意な学生は筆で野菜の絵を描き、図にまとめることが得意な学生は学びのコメントを精査してそれを図示する、という形でそれぞれが自分の得意なことを活かして関わるという全員での作業が行われた（図７）。この全員での作業が行われた背景要因には、受講生の数が少数であったこと、幾度もグループ作業でお互いの個性が十分に共有されていたこと、彼らが取り組みたいと希望した作業であったことなどが考えられる。ここで特筆すべきは、彼らが自分たちの学びを楽しみながら主体的にまとめ、生き生きと形に表現したことであり、それは大いに評価できることである。とりわけ学生各人が自分たちの得意なことを活かした形でまとめ、全体としてまとまりのある報告書に仕上がった点は、学生たちのプロジェクトチームの一体感の現れであろう。そこにある笑顔は今回の学びが有意義であったことを反映していると評価できよう（図８）。なお完成した報告書は、２月に開催されたアカデミックフェア[5]において岡村氏に学生から手渡され、「こんなに嬉しい報告書は初めてです」とコメントをいただいた。

図７　役割を分担しながら全員で報告書を作成する

学生たち
図８　完成した報告書と学生たち

[5] アカデミックフェア：三重大学における共通教育・学部専門科目・卒業論文等の学習の成果を、専門外の方にも分かりやすく発表することを目的とした合同発表会。

4. 講義全体を振り返っての学生の学び

講義の最終課題として、表６に示す項目について自由記述を求めた。受講生はそれぞれの学んだ瞬間を記述し、それに関与した要因を考え、自分の今後への影響について記載することが求められた。

表６　最終課題における学生のコメント一覧

項目	学生のコメント	学部	学年
1	カフェが終わって全員で報告書を作ったり、まとめをしたりしたとき。また、ソーシャルレジャーや対話のワークをしていた時。	人文学部	1年
2	森谷さんをはじめ、カフェに来てくださった方々や、サポートしてくださった先生やSAさんはもちろん、一緒に授業を受けた仲間たちのおかげだと思います。		
3	みんなで何かを作り上げるということの楽しさや充実感を改めて感じることができました。また、それぞれの人の意見を聞くうちに新しい考え方やアイデアを学べました。		
4	人と関わることが本当に多い授業だったので、コミュニケーション能力が向上したのではないかと感じています。また、発表や対話でミスをしてもまた次に頑張ればいいと思えるようになり、ポジティブにものを考えることができました。		
1	津有機農学校さんとカフェでの、対話の最中。	人文学部	1年
2	対話がいかに難しいか。自分の言いたいことを満足に申し上げることも、津有機農学校さんのおっしゃることを拝聴するのも、両方不十分に感じた。腑に落ちない対話だな、と対話の最中に感じたときが対話の難しさを痛感した瞬間だった。		
3	対話が想像以上に難しかったことで、私の中での「対話」のイメージが一転した。というのも、対話は想像よりも一段階上のものであり、デリケート で、崇高なもののように感じられた。正直、対話はそれほどスキルがなくてもできるもので、なんとなくいつも成功という形を押さえられるだろうと思ってい た。しかし、その固定観念が払拭され、対話はスキルと経験が重要であることがわかった。		
4	この授業は、今までの勉強ないしほかの授業と比較し、先輩方や先生以外の社会人の方と対話を通じて学ぶことが多く、私にとって非常にためになっ た。もし、この授業をとっていなかったら、私は社会に出たとき初めて「対話」の難しさを知ったかもしれない。そう思うと、この授業はこれまでの私の人生に おいて新たなものであり、これから経験するであろうことにおいての大いなるステップになると思う。		
1	カフェや報告書作りで先輩など、自分よりも多くの経験を積んできた人たちと話した時。	人文学部	1年
2・3	私はもともと人と話し合ってアイデアを出したり、人前で話すということは苦手でした。しかし、この授業で、自分とは違う発想や考え方の出来 る人たちと接し、実践的なアイデアのまとめ方（KJ法やチャートなど）や発想の転換の仕方、一分間スピーチの方法などを学ぶなかで、対話の面白さを実感す るようになっていました。また、上手くアイデアをまとめて発表できる人に対して、憧れや焦りを感じながらも、それがいい刺激になって、「自分の能力・対話 力をもっと高めたい」、「もっと色んな活動に積極的に参加してみたい」という欲が生まれました。この授業は受動的に教わる場でなく、自ら積極的に、たくさんの人の強みを学ぶことのできる体験の場であったのだろうと改めて思いました。		
4	とにかく色んなことに挑戦して、ファシリテーションなどを練習して、自分の方法を見つけ、実践していきたいです！		
1	第１回、第２回におけるカフェ、及び森谷さんの対話の講義の時に学んだことが一番多いように感じました。	人文学部	2年
2	呼夢フレンズさんや津有機農学校さんのように、直接リアルな体験の話を聞けたので、より相手の立場に立ち、内容の濃いカフェができたおかげだと思います。		
3	カフェの中で、常に相手の立場にたち、どうしたらうまくいくのか、どうしたら相手にとってやりやすいのかを考え、模索していく姿に人と人のつながりや思いやりが非常に大切であると考え、自分にとって、常に相手を思いやる大切さを改めて感じました。		
4	この講義を通して、対話の進め方や人と人の思いやりやつながるなどたくさんのことを学びました。人は思いやりやつながりがないと生きていけな い。思いやりやつながりがあってこそ、楽しく日々生活ができると思いました。なので、これから人と人のつながりや思いやりを大切にしていきたいと思いま す。また、春から3回生なので、この講義で学んだことを就職活動などに活かしたいと思います。ありがとうございました。		
1	川島先生や森谷さんのお話はすごく聴きやすかったです。常に話し方を学んでました。勝手に参考にさせていただきます。	教育学部	2年
2	他の受講生も意識が高かったので、自分もそれについていこうと必死でした。でも、それが刺激になってよかったです。		
3	話し方を意識することで、他の授業で発表する時に話やすくなったりしました。これからも役に立つので授業を受けて良かったです。		
4	人に自分の考えを伝えるのは難しいなーということです。発表する時は、人の目を見てはなす。当たり前のことを続けることが大事であることをあらためて理解しました。		
1	津有機農学校の岡村さんへの感謝状の作成している瞬間。岡村さんの「かっこいい報告書をつくってほしい」というリクエストに対して、私が「感謝状を巻 物にしてみてはどうか」という提案をしたところ、その提案がみなさんに受け入れられ、最終的に素晴らしい巻物を完成させることができた。	人文学部	2年
2	者：岡村さんのユニークさ・みなさんの積極的な参加。物：先生が提供してくださった巻物や筆などの備品。モノ：美し国おこしカフェにて得た知識や興味・美し国おこしカフェを振り返る機会。		
3	今までの大学生活において農業に触れる機会がなかったが、岡村さんとの対話やそのあとの報告書作成を通して、農業の在り方や農業に対して我々の取るべき態 度について根本から見直すことができた。その結果、農業や農産物に対して、以前よりも興味を持つようになった。現在はまだ行動に移すことができていない が、岡村さんとの話にもあったように、学生と農家が連携してひとつのイベントを企画できれば、多くの学生の食に対する意識を変えることができるかもしれな い。そのような可能性に気付くことができたのは、私にとって有意義なことである。		
4	誰しもが何らかの面白いアイデアを頭の中に持っていることに気付いた。その証拠に、授業内で対話をすると様々なアイデアが出てくる。ただ、そのアイデアを具現化するの は非常に難しいことであり、ほとんどのアイデアはすぐに忘れ去られてしまう。今後はいいアイデアが生まれればすぐに行動に移したいし、そのための人脈や機 会を形成していきたいと思った。		
1	「最も」というと沢山学んだことがあるので難しいですが、総合して考えると「様々な人たちと出会い、話合った瞬間（時間）」だと思います。	人文学部	3年
2	①「美し国おこし三重」というプロジェクトそのものの素晴らしさ（いくつかの名産品がありながら、あまり知られていない三重県という場所で、その「強み」を活かすだけでなく、眠った宝を発見し底上げをしていく…そしてその思いを持った多くの人々の「つながり」をつくるという意義が素晴らしいと思いました）、②対話の難しさ、準備の大切さ（授業やカフェなどでたくさんの人とお話しましたが、初めてファシリテーターを務めた津有機農学校さんとのカフェでは、本当の対話の難しさと充実した場をつくるための準備の大切さを知りました。なかなか思ったようにいかなかったという悔しい思いもしましたが、それによって大事なことを学べたのでよかったと思います）		
3	この講義を通した学びにより、「強みだけを見ない、それに頼らない・満足しない」という姿勢を身につけられたと思います。また、多くの学びを吸収できる場をつくるための場つくりの大切さや、まとめ方のコツも少し上達したように感じます。		
4	この講義を通して、私は様々な人と話すことでたくさんの情報や知識、本当に様々なものを得られることを実感しました。そして美し国おこし三重というプロジェクトそのものが、多くのグループとのかかわり合いによって、そういったつながりと進歩を生み出すものであると実感できました。		
1	最も…と言いながら、２つあげます。ひとつは藤本さんのお話です。それぞれの県の「強み」を活かすことの大切さ。ゼミでまちおこしを研究していたり、就職活動している今となっては聴き なれた言葉となってきましたが、当時藤本さんからその話を聴いたときの衝撃は今でもしっかり覚えております。もう一つが「カッコイイ報告書」作りをすると きです。	人文学部	3年
2	人：まずは美し国おこし三重実践を受講した、それぞれ異なった強みをもった仲間たちとやさしくサポートしてくださっ たSAのみなさん、常に私たちに寄り添う形で楽しく授業を進めてくださった川島先生、まちづくり・国おこしの視点を教えてくださった藤本さん また、最近で森谷さんと渡辺さんにソーシャルレジャーについて教わったことも感謝しております！報告書でいえば、ゲストとしてきていただいた岡村さん。ア ツい岡村さんがいたからこそ、素敵なものができたと思いました。物：報告書のための和紙と筆！いつもの授業ではpost itのボードバージョンにお世話になりました。		
3	まず、「無茶なことが逆におもしろい」ということ。どうしても大学生になってから、そういうことは考えたことすらなかったのですが、「巻物風の 報告書」にしても、ソーシャルレジャーを考えるにしても、一見「何の役に立つの？」と思われたり「いい年齢の大人がなにやってんの？」と思われたりするよ うなことが、さまざまな人とのつながりをもたらす面白いことなのだと知りました。「大学生で未熟だから社会に出ていけない」ではなく、むしろ楽しんで積極 的に外部の人と交流すべきなのかもしれないと感じました。		
4	3で書いたように、大学生同士はもちろんのこと、大学以外の人と積極的に出会いたい、いろいろな話をしてみたいと思うようになりました。これは 私自身、一番、本当に進歩したところで、就職活動にも活かされています。美し国おこし三重実践で「こんなに面白いことを企画している人がいるんだ!!」と いう人にたくさん会うことができました。（学生から外部の方まで）また、今まで見えてこなかった私の強みを発見できたかな…と思います。地味で基本裏方仕事が好きなタイプなので、美し国おこし三重を企画した三重県の活動には共感するものがありました。私も将来は三重県自体、三重県に住んでいる人たちの「強み」を輝かせてあげられるような活動を継続していきたいと思います。		

振り返り1：半期の講義の中で、「最も何かを学んだ瞬間」はどのような瞬間でしたか？

振り返り2：その学びをあなたにもたらしたもの（者、物、モノ：環境）はどのようなものでしたか？

振り返り3：その学びであなたの何が変わりましたか？あなたにとってどのような意味がありましたか？

振り返り4：この講義を通してあなたのキャリア（生き方・社会観 etc）に何か変化はありましたか？

学生たちの学びの瞬間を概観すると、主に「カフェなどの直接の交流の場」、「振り返りの作業（感謝状、報告書の作成）の場」に自らの変化の要因を見出していることが伺える。次節に考察してみたい。

4-1. 直接の交流からの学びについて

本講義の狙いであった実践者との直の交流から学ぶという点については、学生にとって十二分に刺激的であったことが読み取れる。「対話がいかに難しいか。自分の言いたいことを満足に申し上げることも、津有機農学校さんのおっしゃることを拝聴するのも、両方不十分に感じた。腑に落ちない対話だな、と対話の最中に感じたときが対話の難しさを痛感した瞬間だった」、「本当の対話の難しさと充実した場をつくるための準備の大切さを知りました。なかなか思ったようにいかなかったという悔しい思いもしましたが、それによって大事なことを学べたのでよかったと思います」というコメントに見られるように、学生たちは関わるということを、身体レベルで体感し学んだと言える。そして学生たちのこの悔しさを無駄にすることなくさらなる学びにつなげるべく、第三回のカフェでは対話に焦点化したワークショップを設定した。学生たちはファシリテーションについて学び、実際に体験することでスムーズな対話に必要な配慮や工夫を実践する場を得た。本講義で学びが深まった要因の一つは、学生の反応に応じて必要とされる学びの環境や情報を提供する機会を柔軟に調整が可能であったことであろう。

そして実際に講義の中の活動の取り組みを通して「発表や対話でミスをしてもまた次に頑張ればいいと思えるようになり、ポジティブにものを考えることができました」との振り返りからは、本講義が安全に試行錯誤できる場として機能していたことが伺える。冒頭でも述べたが、他者との関わりは非常に多くを学ぶ機会であると同時に、傷つきや挫折を負う可能性をも包含している。教育の場である以上、講義における経験が一定以上の傷つきの体験とならないような教育的・心理的配慮が重要であろう。その点、本講義内のコミュニティの中で“安全に”適切な対話のスキルや経験を蓄積できたことは評価できると言える。そしてそれを可能にした背景には、ゲストの語りにあった“対象の活かせる「強み」や「善さ」といった個性を大切に捉え、それを協同の中で生かそうとする姿勢”を学生は適切に受け取ったことが挙げられる。そしてそれは、他者を批判し、切り捨てることではなく、互いを生かす形を模索し協力して作業を進めることに反映されたのではないだろうか。

4-2. 振り返りの作業（感謝状、報告書の作成）の場からの学び

本講義における感謝状、報告書の作成は、カフェにおける交流からの学びの省察を深める為に設定した課題であった。当然、受講者同士での振り返りが行われるため、学生はゲストに加えて受講生同士の交流をさらに深めることとなる。ある学生は「上手くアイデアをまとめて発表できる人に対して、憧れや焦りを感じながらも、それがいい刺激になって、“自分の能力・対話力をもっと高めたい”、“もっと色んな活動に積極的に参加してみたい”という欲が生まれました。この授業は受動的に教わる場でなく、自ら積極的に、たくさんの人の強みを学ぶことのできる体験の場であったのだろうと改めて思いました」とコメントしている。これはまさに受講生同士の横のつながりの中から生じた成果であると言える。

「もっと能力を高めたい」とするこの学生に生じた動機は、さらなる成長に向う肯定的な姿勢であり、外部から意図して生起させるのは難しい個人内の変容である。しかしこの学生が受講生に対して否定的なイメージを強固に持っていた場合、おそらく「憧れ」は嫉妬に、「焦り」は不安として学生を縛っていたかもしれない。上述した本講義のグループの雰囲気が肯定的で、他者排斥的でなく、各人の強みに焦点化する形で展開したことが安全なイメー

ジの変容を促したと考察できよう。

また別の学生は「まず“無茶なことが逆におもしろい”。（中略）“巻物風の報告書”にしても、ソーシャルレジャーを考えるにしても、一見“何の役に立つの？”と思われたり“いい年齢の大人がなにやってんの？”と思われたりするようなことが、さまざまな人とのつながりをもたらす面白いことなのだと知りました」とコメントしている。巻物の報告書作成を決めた学生に対し、筆者は「せっかく作成するのであるから本格的に取り組むように」と和紙と墨、筆を提供した。それは何事も全力で取り組んでみる中に何らかの学びがあると期待したからである。学生を見守る支援者は、この学生が言うような“無茶なこと”の安全面に配慮しながら見守ることが求められているのかもしれない。さらに学生は「“大学生で未熟だから社会に出ていけない”ではなく、むしろ楽しんで積極的に外部の人と交流すべきなのかもしれないと感じました」と言葉を続ける。このように講義内での体験がこれからの外に向けた活動につながる点が実践を重視した本講義を通した留意すべき変化と言えよう。

最後に本講義の授業改善アンケートで示された学生の学びの評価を表７に示す。

表７　授業改善アンケート「４つの力」に関する項目の回答結果

	全く身につかなかった	わずかながら身についた	少し身についた	ある程度身についた	かなり身についた	下位要素	パーセンテージ
感じる力	-	12.5%(1)	-	62.5%(5)	25%(2)	感性	50%(4)
						共感	37.5%(3)
						モチベーション	62.5%(5)
						主体的学習力	25%(2)
考える力	-	-	-	50%(4)	50%(4)	幅広い教養	25%(2)
						専門的知識・技術	12.5%(1)
						批判的思考力	12.5%(1)
						課題探求力	100%(8)
						問題解決力	50%(4)
コミュニケーション力	-	-	-	25%(2)	75%(6)	情報受発信力	62.5%(5)
						討論・対話力	75%(6)
						指導力・協調性	75%(6)
						社会人としての態度	37.5%(3)
生きる力	-	-	-	62.5%(5)	37.5%(3)		

括弧内は度数を示す。

本学における教育目標である「感じる力」「考える力」「コミュニケーション力」それらを総合した「生きる力」について、学生は概ね身に付いたと評価している。特に「コミュニケーション力」は身に付いた実感が強かったと見受けられる。まさに交流を重視した実践科目として一定の成果を示したと言えよう。

また「考える力」の下位要素である「課題探求力」については受講生全員が評価した項目であった。これはグループ活動における役割分担や作業の進捗において、自分にはどのような関わりが求められているか、グループにできる貢献はどのようなものかを各人で考え、行動するといった点で涵養されたものと推察される。また「感じる力」の下位要素である「モチベーション」も比較的高い値を示した。これは上述の本講義における体験が、彼らのこれからの学生生活を含む日常において何らかの示唆を与えたことが反映されていると考えられる。

ある学生は「授業内で対話をすると様々なアイデアが出てくる。ただ、そのアイデアを具現化するのは非常に難しいことであり、ほとんどのアイデアはすぐに忘れ去られてしまう。今後はいいアイデアが生まれればすぐに行動に移したいし、そのための人脈や機会を形成していきたいと思った」とコメントしている。学生たちは講義の中で実に様々なことを感じ、考えていると思われる。それは講義形式の科目であっても実践形式の科目であっても同様であろう。しかし、上記の学生が言うように、その中身を形にすることは難しい作業であるし、またそれはすぐに消えてしまうものなのであろう。しかし、今回の講義を通して、自分の中に生まれる疑問や関心、アイデアを形にしていく作業自体は、主体的で生産的な作業であり、そこからは様々な成長の刺激を得られることが示唆された。

実践した体験の振り返りを通して得られた学びこそが就職や人生において問われる真価となり得る訳であるし、“自分自身の人生を生きるキャリア”として考えるのなら

ば、実践を伴わない人生など存在しない。この視点を踏まえて考えるならば、キャリア実践科目の一つのミッションは、学生の「生もの」の体験をしっかりと振り返り、風化する前に形にしてみる機会を保証する点にあるのかもしれない。その際の振り返りの工夫は、各実践領域において多彩を極めるであろうし、今回の講義における振り返りの仕掛けも甚だ不十分であるが、今後の実践の中で検討を重ね続けることが重要であろう。何よりもキャリアとは「生きること」であり、生きることは止められない営みであるのだから。

引用文献

1）河合隼雄（1992）心理療法序説　岩波書店

2）皆藤 章（2010）体験の語りを巡って　誠信書房

3）三重大学（2010）平成 22 年度「大学生の就業力育成支援事業」申請書

（三重大学高等教育創造開発センター（2011）2010 年度アカデミックプラザ活動報告書内収録）

4）三重大学（2011）三重大学共通教育履修案内，50.

5）氏原寛・西川隆蔵・康 智善（2006）現代社会と臨床心理学　金剛出版

付記

本講義を開設するにあたり、幾度も打ち合わせの時間を割き、ご協力くださった美し国おこし三重プロジェクトの田辺隆志氏、地域担当プロデューサーの森谷哲也氏をはじめ事務局スタッフの皆様、地域行政の視点と熱意を学生に伝えてくださった美し国おこし三重事務局の藤本和弘氏、美し国おこしカフェにおいて貴重な実践知を分かりやすく学生に語ってくださった呼夢フレンズの堀川まり子氏、津有機農学校の岡村和哉氏に心より御礼申し上げます。